様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５５１

研究課題名（和文）学校方言の成立と展開に関する基礎的研究ー学校建築用語を軸にー

研究課題名（英文）Fundamental study about formation and deployment of a school dialect

研究代表者
中田　敏夫（NAKADA, Toshio）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：６０１４５６４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円、（間接経費）　　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来「気づかない方言」などとして関心が示されてきた「学校方言」について、学校建築用語に絞り、文献資料と方言資料から総合的に検討することで、個々の学校方言並びに標準語の成立と展開を分析し、その一般的な傾向を導き出すことを目的とした。
「屋運」という愛知県一宮市に分布する語形を主な事例として、発生から周辺への広がりの実態とその背景である教育関係資料を渉猟し,縦軸と横軸をつなぎ合わせ、立体的に実証した。その結果、従来日本語資料として看過されてきた教育史資料及び各種法令を現代語研究を進める上で必須の資料群として位置づけ、十分な事例研究数とは言えないが、研究課題については達成できたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research was extracting to a school construction term and examining synthetically the "school dialect" with which concern has been shown as the former "dialect which his does not notice" etc. from literature data and dialect data, analyzed formation and deployment of each school dialect and the standard language, and aimed at drawing the general tendency. The educational relevant data which are the actual condition and the background of a spread from generating were read extensively by having made into the main examples the word form distributed over Ichinomiya-shi, Aichi "oku-un", and it proved in three dimensions.
As a result, when advancing modern language research, the history-of-education data and the various statutes which have been conventionally overlooked as Japanese data are positioned as an indispensable data group, and cannot be said to be the sufficient number of case studies, but it is considered that the research task has attained.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：学校方言　建築用語　教育関係文書　語誌

１．研究開始当初の背景

学校用語とは学校教育に関係する用語であるが、本課題では学校をめぐる社会教育分野なども広く視野に入れることで、その語を包括的に分析することを目指す。例えば、学校用語の一つ「体育館」は一般的に学校体育館を表すことばと捉えられるが、元々社会教育分野で使われ始めた語である（例えば大正期の東京 YMCA 体育館）。一方「義務教育諸学校施設費国庫負担法」（1958 年）ほか施設に関する法規では現在も「屋内運動場」が用いられ、学校図面に「屋内運動場」は普通に使われる。後述する愛知県一宮市のみに使用される「オクウン」（屋内運動場の略称）の語誌を考えようとする場合、社会教育分野施設としての体育館と学校施設名称としての屋内運動場の歴史をひろく捉えていかなければその実態と歴史には迫れない。

学校用語についてはこれまで、教育法規との関わりでは『学校ことはじめ事典』（小学館 1987）や、歴史学の観点からの概説である『学校史でまなぶ日本近現代史』（地歴社 2007）などがあり、用語の使い分けや変遷についてもそれなりの記述がある。しかしいずれも日本語学の観点からのものではない。一方日本語学では、佐藤喜代治「『学生』『学匠』並びに『書生』」（『文化』32-1　1968）など用語に関する個別的な論考は散見するが、学校用語として総括的な記述を試みたものはみられない。また「気づかない方言」の対象として学校用語はよく取り上げられてきた。例えば高橋顕志・井上史雄『気づかない方言　全国分布図 1995 速報版』（1996）にはコージ（校時）、ホーカ（放課）、ビーシ・トリノコヨーシ（模造紙）など 15 語ほどの学校方言があげられている。愛知県で言えば、「放課・B 紙」が該当する。しかし、これらの語についても地理的な分布の言及はあるものの、歴史的な成立発展過程について触れられたものは極めて少ない。管見によれば、「ラーフル」（黒板拭き）に関する詳細な分析がある程度である（上村忠昌「『ラーフル』考」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』35 号 2000）。

申請者はこれまで静岡県方言と植民地台湾における国語政策・国語教育に関して研究を進めてきた。拙著『静岡県のことば』（明治書院 1999）の後書きで、「イタダキマシタ」（ご馳走様）について、明治 29 年発行『台湾適用作法教授書』に「食し終れば、亦会釈すべし。（用語例）イタダキマシタ。」とあることを指摘し、静岡県方言だと思っていたイタダキマシタが明治時代標準的日本語と目され台湾で指導されていた事実に触れた。「学制」後全国で学校制度が動きだし、方言社会のみで生きてきた人々は近代社会の一つの装置である「学校」という場を通じ、新たな語彙を身につけることになる。しかし、その用語は他の近代語と同様あらかじめ標準語としての資格を備えたものではなかった。食事の挨拶で言えば、声を全員で合わせてから食事するという習慣はそれまでの方言社会にはなく、イタダキマシタは静岡・長野県周辺の学校現場で新たに生み出され流布したものだった。一方その理由は不明だが、台湾の教育の場でも標準的日本語として提示されたものと考えられる。これらから、学校用語は方言同様、一般的表現が定着するまで地方毎に多様な表現が生成される状況にあったことに気づく。その最大の理由は、教育制度の細部は当時文部省で一律に定め公布されるのではなく、学制期においては府県や大学区単位の学事会議等が開かれ、教育令期でも地方教育行政機構毎に教育の実質が担われていたことに起因する。また背景には江戸時代の藩校の存在も考えられ、地域性を形作った。例えば「登校」については、熊本時習館には「参校・赴校・赴館」の用語がみられ、明治期には「登校・上校・参校・昇校・出校」などの語が、全国の種々の教育史資料

から得られる。

これまで愛知県下の気づかない学校方言として、まず体育館の意の一宮市の「屋運」」をあげ（「屋運（おくうん）」の成立－愛知県一宮市内における屋内運動場名の－」2010）、この成立過程には、法規上の施設名称（屋内運動場）と通称（体育館）の違いがあり、体育館が学校体育館に対する通称として成立していく過程を明治以降の学校施設名称の変遷と共に記述している。同じく昇降口を意味する江南市の「脱履」・名古屋市の「土間」などを報告している（「気づかない方言「脱履」の成立－昇降口名の変遷－」2011）。そのほか愛知県下中心に「黒板拭き・黒板消し」、「B 紙（模造紙）」、「分団（通学班）」、「放課（休み時間）」、「アルボース・シャボネット（学校設置液体洗剤）などの語を学校方言として、教育史資料の検討と共にその成立と分布に迫っている。

２．研究の目的

本研究は、従来気づかない方言などとして関心が示されてきた学校方言（授業ほか学校に関わる用語のうち地域特有のことば）について、学校建築用語に絞り、文献資料と方言資料から総合的に検討することで、個々の学校方言並びに標準語の成立と展開を分析し、同時に複数の建築用語を重ね合わせることで、学校方言に共通する語彙論的な特徴と、成立と展開に関する一般的な傾向を導き出すことを目的とする。学校用語は江戸時代の藩校に端を発し、明治時代の学校制度の開始から現代まで続く分野である。その意味で従来日本語資料として看過されてきた教育史資料及び各種法令を、近・現代語考察の資料群として位置づけることも目指したい。

３．研究の方法

学校建築用語に関する資料を、a)校舎などの構造物、b)黒板などの設備、c)黒板拭きなどの物品に分類した上で、これらを(1)明治期以降の教育史資料、(2)方言資料に分けて調査する。この過程で学校方言を収集することになる。教育史資料等の文献は図書館･資料館・大学図書館などでの調査とともに、ネット検索（「青空文庫」「ヨミダス歴史館」）なども手がかりにする。方言資料はネット検索とアンケート調査を主とする。

データベースの作成、語彙分析、建築用語の比較研究を行った上で、学校用語・学校方言の成立に関する研究を行い、あわせて近・現代語研究資料としての教育史資料の位置付けを試みる。そして近代語から現代語を考察する資料群として教育史資料及び各種法令を位置づけ、近･現代語研究に新たな視点を見いだす。

４．研究成果

本研究の導入となり、また研究論文としてまとめた「屋運（おくうん）」の「成立」に関するものと「分布」に関するものにしたがって、研究成果の概要と本研究の意義を述べる。

「屋運」という愛知県一宮市に分布する「体育館」に関するいわゆる「学校方言」を表す語形を事例として、その語の発生から周辺への広がりの実態を調査し、その背景である教育関係資料を渉猟し、横軸と縦軸をつなぎ合わせ、立体的に実証したものが本研究である。つまり、まず横軸としては、現在の方言分布の実態を種々の資料により明らかにした。ひとつは、若者世代（現役学生）へアンケート調査を実施し、その結果から愛知県下における方言分布の実態を明らかにするという方言学のオーソドックスな手法である。その結果、「オクウン（屋運）」という極めて珍しい方言形は一宮市内に限られることが明らかになった。次に県下の小中学校のホームページ掲載の「体育館」の名称を拾い出し、同様のことを実証した。いわば文献調査で補完し

た形であり、これにより「オクウン」は一宮市内に限られることが実証できたと考える。

次に、この分布の成立を歴史的に考えるために、一宮市内の年齢別・地点別調査を行った。これにより、一宮市内においても分布の様相が異なることが明らかにでき、それは市街地から周辺部へ年代が若くなるにつれて広がっていった事実が確認された。つまり、方言形というものは都市部で新たに生まれ、時代とともに周辺に広がるという方言伝播の基本的な形を踏襲したものであり、学校方言であってもこの基本に準ずることを実証したともいえる。そして、その周辺への伝播は一宮市内の市町村合併とともに広がるのだが、決してそれは行政区画である一宮市を越えていかないという学校方言の特徴を反映したものであることも明らかにしえた。

さて、これら地域的な分布を取ることになった「オクウン」という語はそもそもなぜ生まれたのか、またそれはいつくらいの時期に生まれたのかという点を、明治以降の学校制度が動き出していく段階にさかのぼり、「屋内運動場」と呼ばれるものの名称を文献資料から明らかにしていった。これが本研究の特徴であり、研究上の意義である。

渉猟した文献資料は、例えば、明治時代で挙げれば、文部省関係法令の明治 14 年「小学校教則綱領」、明治 15 年「文部省示諭」「小学校ノ建築」、明治 24 年「小学校設備準則」（文部省令第２号）、小学校令第 17 条小学校設備準則第六条、明治 32 年「中学校編制及設備規則」、明治 32 年「高等女学校編制及設備規則」、明治 33 年「小学校令施行規則」、明治 34 年「中学校令施行規則」、現場学校建築図面である明治 8 年「新潟県小学校建築図」、明治 28 年の文部大臣官房会計課建築掛「学校建築図説明及設計大要」、同書「尋常中学校及尋常師範学校設計ノ実例」（大分県）、明治 37 年「学校建築設計要項」（文部省官房建築課）、調査報告の明治 38 年体操遊戯取調委員会報告書、全国各地学校規則等の明治９年「愛知県師範学校付属小学校校則　生徒心得」、地方行政の法令関係資料の明治 20 年富山県通達「施設規定」などとなる。

これら文献資料を大正、昭和、平成とつなぎ、屋内運動場に関する正式名称を確定していった。一方、明治以降の文献資料のうち、新聞記事、文学作品などの調査を行うことで、現場での使用状況を確認していった。これにより、「体育館」という用語の誕生と流布の流れを抑えることができ、「屋内運動場」と「体育館」の対立が、学校教育上の名称と社会体育施設名称としての差として対峙して使われてきたことが明らかになってきた。そういう中で、法令レベルの正式名称としての「屋内運動場」を通称としても用い、単略形としての「オクウン」という名称を誕生させたのが、一宮市であった。このような誕生は偶然の結果だが、全国で同様の誕生を山口県防府市で確認し、それは一宮市と同じ経緯であったことを明確にした。

「屋内運動場」の事例により、研究成果の概要と本研究の意義を述べてきた。従来日本語資料として看過されてきた教育史資料及び各種法令を、現代語研究を進める上で必須の資料群として位置づけたと考える。また、近代語研究、方言学研究、そして学校用語の成立と波及に関する研究の新しい地平を切り開いたと考える。

まだ十分な事例研究数とは言えないが、現在「昇降口」を意味する江南市の「脱履（ダツリ）」、名古屋市の「土間（ドマ）」、「黒板拭き・黒板消し」、「分団（通学班）」、「放課（休み時間）」などの用語についても調査が進んでおり、今後報告を予定している。それら成果をもって「学校用語」と「学校方言」の関係、そして国語学研究における教育関係資料の位置をさらに明確にしていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 中田敏夫・稲垣拓也「愛知県一宮市における「屋運」の分布」（『愛知教育大学研究報告　人文･社会科学編』第 63 集　1-9 2014.3）査読なし

〔学会発表〕（計１件）

① 中田敏夫・加古環紀「「黒板拭き」に関する用語の変遷」（日本方言研究会第 93 回研究発表会　高知城ホール 2011.10.21）　査読なし

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
中田　敏夫（NAKADA,Toshio）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60145646

(2)研究分担者
酒井　恵美子（SAKAI,Emiko）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号： 00217754

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：